

サマースクール 2018年度の報告

表現を通して生きものを考えるセクター

「季刊生命誌 100号の企画会議に参加しよう！」

生命誌研究館のサマースクールは、たったの二日間ではありますが、スクール生として参加する方々にとって、他にはない、ここでしか経験できない時間を過ごしていただくということがキモだと思います。そして参加した一人一人の方が、生命現象（生きていること）を知る「研究」という行為と、ふだんの日常の暮らし（生きる）とを、自分なりに連続したものとして生きるには、どうすればよいだろうかと、つまり、生命誌を共に考える人になっていただければ、という思いで、毎年行っています。



例年ですと、「表現を通して生きものを考える」課題として、展示制作等のテーマを立てて、企画から制作、そして発表までの大まかなアウトラインを準備したうえで、サマースクール当日に臨むのですが、今年は「季刊生命誌 100号の企画会議に参加しよう！」というタイトルが示す通り、今、セクター内で課題としている案件をそのまま課題として、表現の現場での会議に実際に参加していただくこととしました。参加した方には、季刊「生命誌」を読んでいる方も、そうでない方もありましたが、それぞれの方が、当館の活動をどんな風に受け止めていらっしゃるのか、また何を期待するのか、など多様な意見を交換する貴重な機会となりました。

スクールの前に、参加する方々の「簡単な自己紹介文」を拝見すると、お一人お一人が、なぜ「生命誌」に関心を抱いて今回応募してくださったのかということが、それぞれのライフストーリーに重ねて語られており、企画した側の責任の大きさを改めて噛みしめることとなりました。参加した方にとってなるべく



意味のある2日間となるように、それには、何しろ誠実にやるしかない。と思って臨んだサマースクールでした。後日に皆さんから送っていただいた感想文を拝見して、なんとか目標は達成できたものかと、ほっとしております。 それではみなさん季刊生命誌 100号に向けて、さらにポスト 100号に向けて、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

村田英克（チーフ）

参加者の感想

生命誌について考えた 2 日間

参加者：K.S.

生物の一種としてのヒトは生命をもつさまざまな種類のなかでどのような位置づけになっているのか、これまでの間に絶滅した種もあり、今なおその危機にさらされている種もある。生き物は歴史を重ねてきたなかで、ヒトはどのように生きていくといいのかということについての考え方を模索していました。そのときに生命誌研究館の理念に出会いました。



人の生命の誕生の時期から終焉のターミナルケアの時期までを含む人間とのかかわりのOQLを求めながら研究と臨床実践を進めてきた一人として、この理念を基軸に、今後にかかわる人たちとのかかわりかたを見出せるようでありたいという目標をもって参加させていただきました。中村館長の著書を数冊読んでから臨みました。生命誌研究館の訪問は初めてでした。その場に身をおいたとき、人間・ヒトの位置づけ？などの理解も深まり、今回のスクールの内容に期待を寄せました。2日間、100号を迎える生命誌冊子の作成過程の段階を提示していただき、ほぼ初心者である6名の参加者に「考えること」と「発言の機会」をいただきました。これまでのあいだに取り組みされた道程をなぞらえながらの演習体験は、理念（観）・軸の検討・再考の繰り返しでした。その過程はそれぞれの人が生きてきたさまからの提案になっていたのではないかと思います。スタッフの皆様と初めて出会った参加者同士の発想のいきかいはうれしい場になりました。それぞれの（人生の）経験からのものであったのかと思います。素敵な時間をすごさせていただきました。ありがとうございました。どのように場での時間の過ごし方になるのかという不安を持っていたのですが、暖かく受け止めてくださるスタッフさんたちの場のなかでしたので、安心しました。その空間にいさせていただけたことは今までの編纂過程の一部をも感じ取ることや気づきが多かったと思います。

生きとし生きるものたちへの考え方の軸を得たうえで命との向き合い方、今を生きる人間としての生き方についての示唆を得られたと思います。もどってからの保育・幼児教育職等や、保護者たち、発達課題を抱えている青年とのかかわりのなかでも、以前とは違う手ごたえを感じるようになりました。関係する人たちに生命誌研究館の訪問も含めて広報していきたいと思っております。100号までの冊子の刊行、及び100号記念号を楽しみにしております。

この夏に1冊、その後3月にもう1冊著書を刊行します。そのなかで今回の経験したことなどが生きてくるのかどうかはまだみえていませんが、3月のほうについては、原稿そのものをしっかりと読み込みながら、いきるように編纂したいと思っていますところです。

今回受け入れていただいた生命誌研究館のみなさまがたのあたたかいお人柄などはこころにしみいりました。ありがとうございました。

地球規模での異変が続いております。そのなかにあって生きていくわけですから、いろいろと考えていきたいと思います。皆様方のご健康を祈っております。

「季刊生命誌 100 号の企画会議に参加しよう！」に参加して

参加者：H.T.

生命誌研究館、中村館長を知ってから半年もたないにもかかわらず、サマースクール応募を決めました。「生きているとは」「私とは」という根源の問いへのヒントが得られる、生命誌に込められているものを感じることができれば、そこへの糸口が見つかる、世界が開かれると感じたのです。生命誌に触れてからまだ半年にも満たない私にとっては冒険的な参加でしたが、少しでも近づきたいという気持ちが先立ち、後の事を考えずに行動してしまいま



した。参加の日までの期間は、他の皆さんについていけるかという不安と一員として参加できるというわくわく感とであっという間に過ぎていきました。セミナーまでに少しでも生命誌について知識を得たいがために、この本も、この資料もと欲張ってみましたが、どれも付け焼刃なものでした。そして当日、いざ、100号企画会議に参加すると、そこはまさしく現場でした。セクターの皆さんにスクール生6名が加わり、意見を述べる。100号企画へこんなに直接的に参加できるとは、思ってもいないほど、冊子、WEB、書籍についての意見を汲み上げて頂きました。様々な立場のメンバーの皆さんから発せられるアイデア、意見、その人らしさをあらかず多様な捉え方、そしてスタッフの方々からの生命誌の根幹をあらかず言葉でいっぱいでした。感覚的な言葉でしか表現できない私でしたが、意見を発することで、更に深く自分の考えを認識することができました。「生きているとは」の疑問を受け止め、考え続けることが大事であると気づかせてもらった時間でした。

とても楽しく、とても緊張し、とても考えて、とても耳を傾けた時間を、「また次の機会も」と願う私です。

企画会議に参加して

参加者：M.M.

職業柄、「どのように情報を発信するか」ということには非常に興味があり、今回の「季刊生命誌 100 号の企画会議」に参加させていただきました。

予め、「100 号記念号の特集の切り口・アイデア」「表現媒体についての意見」「100 号以降の季刊生命誌のあり方について」の 3 点を宿題として頂いていたものの、あまり考えがまとまらないまま当日を迎えることになりました。



今回参加させていただいて、これまで何気なく受け取っていた季刊誌に、スタッフの方々の強い想いと非常な手間ひまが込められているのを知り、まずは敬意と感謝の思いで一杯になりました。それだけに、一時の参加者の立場から発言することに若干のためらいを感じながらも、結果的には色々勝手な意見を言わせていただきました。ご迷惑だったのではという思いと共に、少しでもお役に立てたのなら本当に嬉しいと思っています。

100 号の発刊まで首を長くして楽しみに待っております。最後になりましたが、表現セクターのスタッフの皆さま、本当にお世話になりました。この場をお借りしてお礼に代えさせていただきます。ありがとうございました。

生命誌から日常へ

参加者：T.H.

たった 1 年前に生命誌を初めて知った自分、しかもどっぷり文系の叔母さんが「季刊生命誌 100 号の企画会議」に参加するなんておこがましいと思いましたが、唯々、好奇心だけを携えての 1 日半、集った 6 名が、同じ部屋にいて違う窓を覗いている光景にとっても刺激を受けました。でも、外の広い世界では繋がっている……。それはまさに生命誌の世界観なのだと再確認しました。短い時間でしたので、自分の疑問を探ることまではできませんでしたが、なにより視野を広げられたことが何よりの成果です。



今後、自分の日常に生命誌を重ねていく、どんなものが創造できるだろう・・・と今、とてもワクワクしています。ありがとうございました。

サマースクールに参加して

参加者：Y.N.

季刊生命誌 100 号の企画会議では、生命誌の表現を形作る現場をのぞき見、ペーパークラフトやホームページ内のサイトを制作する方々の「伝えたい、表現したい」熱い想いが感じられました。何か斬新なアイデアを出せればよかったのですが、なかなか難しく、それでも一番おもしろかったのが、100号記念テーマにふさわしい動詞を考えると、参加者それぞれの立場から様々な言葉が提案されました。違う背景を持つ人々との交流がもたらす視野の広がりは私にとって貴重なもので、多くの刺激や感銘をいただきました。



ランチタイムには他のラボの研究者の方や参加者の方ともいろいろなお話ができ、また、終わりの会での年若い方々の研究発表も微笑ましく、全体的にアットホームな雰囲気に包まれて、サイエンスを愛する人々の集うオアシスのような環境で、充実した1日半を過ごすことができました。参加させていただいて、本当にありがとうございました。

表現を考えるとということ

参加者：R.H.

表現を考える――。その楽しさ、難しさを大変実感した二日間でした。私が参加させて頂いたセクターの内容は「季刊生命誌 100号の企画会議に参加しよう」でした。自分の仕事から、自分の考えを表現するという力は大切であり、自身の課題でもありました。季刊生命誌の発行やホームページの運営は、多くの方々の知恵、経験などを凝縮し、誰が見てもわかるような形で表現されています。この活動を実際に体験することで、得られることが沢山ある。事実、物事を多面的に見るという重要性を肌で感じるようになりました。



1 日目は、事前に送られてきた生命誌カードやホームページの構成に目を通し、良い点や改善点などを発表。受講者の意見を共有し合いました。受講者みなさんや研究館の方々の体験、経験を交えての発表となり、そういう視点もあるのだ、人生観というのも考えさせられました。2 日目は、前の日の意見を踏まえながら、季刊生命誌 100号の内容をどう展開するかを議論しました。例えば、生命誌「カード」という形態を今までとってきたましたが、それを変えるかどうかや生命誌の表題である動詞のテーマを模索したり、付録内容はどのようなものがいかなど、ここでは表せないくらいに沢山の内容、言葉が飛び交いました。

特に動詞のテーマは、皆さんそれぞれの思いや日本語に対する意識を強く感じられました。意見を積み重ねる中で、自然と自分の頭の中に新しい発想を浮かべることができましたし、今回の企画だけでなく、仕事にも取り入れ、活かせる工夫が見えてきたと思います。

表現を考えるということは、自分の意見を持つだけでなく、他の方々の視点を踏まえ、さらに発展させていくということだと感じました。答えがないからこそ、何にも縛られず、自由であり、難しいと思う所なのだと考えます。本当に多くの方々に、参加して頂きたいセクターだと思います。最後になりましたが、今回素晴らしい2日間を過ごさせて頂いた、受講者の皆さん、研究館の皆さんに、感謝の意を申し上げます。